

郷土博物館・文学館だより

夏休み体験講座「紙すき」開催される

8月12日から

「夏休み作品展」も

始まります



「紙すき」制作風景①

去る7月26日(土)と27日(日)、当館で「紙すき」の体験講座が開催されました。今年は、親子で参加した小学生から一般の方まで、幅広い年齢層の応募がありました。制作されたハガキは、いずれも参加者が創意工夫し、個性的な作品が数多く見られ、ハガキというよりはむしろ額に入れたいような芸術的な作品が出来上がりました。

こうした作品は、当館でこの後開催される「勾玉づくり」の作品と共に、「夏休み作品展」で展示されます(8月12日～9月15日)。



「紙すき」制作風景②

今年の展示では、講座で制作された作品のほかに、「紙すき」の制作行程をわかりやすく解説した展示や、古い時代の「紙」の実物展示があります。

加えて、近年区内から発掘された土器などの展示もします。

ぜひ、夏休みの自由研究の参考にしてください。

東京オリンピックと代々木国立屋内総合競技場

今年（1964年）はオリンピック・イヤー。まもなく8月8日に北京オリンピックが開催されます。準備に忙しい北京の様子をテレビなどでみると、今から44年前の昭和39年（1964）に日本で、国中が盛り上がった東京オリンピックと重ね合わせる方もきっと多いことでしょう。

さてオリンピックを開催するには、競技を行う施設のほかに選手たちが宿泊する施設など、数多くの関連施設が必要になります。東京オリンピックの時、新宿・渋谷・世田谷区などを中心に新しい競技施設が建設されました。その設計にあたったのは、国や都そして民間の建築家たちでした。渋谷区で競技会場となった施設は、千駄ヶ谷の東京体育館、代々木国立屋内総合競技場（現、国立代々木競技場）、渋谷公会堂（現、渋谷C.C.Lemonホール）、岸記念体育館等ですが、これらもそうした人たちによる設計でした。しかし建物が完成するまでには、いろいろな問題がありました。

その大きな問題が、都心部に近い広大な土地の確保でした。当時渋谷区内にはワシントンハイツというアメリカ軍の占領地がありました。しかしまだ返還されておらず、オリンピック開催決定をきっかけにして、土地の返還と跡地への選手村の誘致運動に拍車がかかりました。やがて官民一体になったこの運動によって返還と誘致が決まり、やっとそこに選手村や競技場が建てられることになったのです。

代々木競技場の設計者には、丹下健三が決まりました。丹下は大阪府の出身で、東京大学建築学科を卒業すると、世界的に有名な建築家

ル・コルビュジエの教え子であった前川國男の建築事務所に入りました。その後、東京大学で教鞭をとり、その時の教え子には黒川紀章、槇文彦、磯崎新、谷口吉生らがいました。

丹下の作品は、この競技場のほかにも東京新都庁やフジテレビの社屋などを挙げることができますが、世界にその名を知らしめたのはこの競技場といっても過言ではありません。

代々木国立屋内競技場は、プール（現、第一体育館）と体育館（現、第二体育館）からなっています。建物の特徴をみると、全体の形はちょうど「カタツムリ」や「巻貝」のような雄姿をしています。屋根は吊り屋根構造で、室内に柱は一本もなく、建物の一番高いところは体育館で42.37mを測ります。メインの競技場は、プールを真ん中にして15,000人を収容できるように設計され、体育館ではバスケットボールの試合が行われました。

東京オリンピックから40数年が経ちましたが、この競技場は修繕を繰り返しながらも今なお現役で活躍し、東京オリンピックの面影を今に伝えているのです。



オリンピック開催時の代々木国立屋内総合競技場

柳田国男と独歩・花袋

柳田国男は日本民俗学を創成した人物として知られていますが、若かりし頃は将来を嘱望された詩人でした。明治30年(1897)に刊行された『抒情詩』では、国木田独歩、田山花袋らとともに「松岡国男」の名前で参加しています。北原白秋は柳田の詩を「藤村の先蹤を成したものであるのではないか。いやもつと純情であるかも知れぬ」と評しています。しかし、柳田は、明治32年6月『帝国文学』誌上で「かの日の歌もいざさらば」として詩作を絶つこととなります。

柳田は明治34年1月から5月の間、渋谷村大字青山北町(現在の渋谷一丁目、御嶽神社付近)に居住していました。当時27歳だった柳田は、前年には農商務省農務局農政課に就職しています。

花袋は『東京の三十年』(大正6年)で柳田の住まいについて次のように書いています。

私は停車場を出て宮益の通へ行って、それからかねて聞いて知っている路を左へと入って行った。(中略)まださびしい郊外の、家と言ってもちらほら藁葺の屋根が見える位のものであった。柳田君はその時一、二カ月ほどそこの農家にある一間を借りて、そこから役所の方へと通っていた。(中略)

「好い処だね。」

「ちょっと好いだらう？」

柳田の住んでいたこの場所は、独歩の家からも近く、柳田は当時のことを「武蔵野の昔」(昭和15年)で次のように振り返っています。

国木田君は今から二十一年前、渋谷の停車

場から少し西北へ入った丘の陰に住んで居て、閑さへあれば東京と反対の方向へばかり散歩をして居つた。(中略)大根畠の先の薄原や、其横手の樞の林などを非常に懐かしがり、其林の中に百舌の声や風の音を聞き、又其樹の間から甲州境の山々の雪の風情を見出した。

その独歩は明治41年に38歳の若さで亡くなりました。

柳田と花袋は、明治40年に花袋が『蒲団』を発表して以降、文学観をめぐって対立します。

「蒲団」が出た時は、私はあんな不愉快な汚らしいものといって、あの時から田山君にけちをつけ出した。重要な所は想像で書いているから、むしろ自然主義ではないことになる。(昭和33年「田山花袋の作品」)

そして、柳田は明治42年『後狩詞記』、明治43年『遠野物語』を上梓し、郷土研究への道を進むこととなります。



柳田国男 (写真提供:折口博士記念古代文化研究所)

文化財紹介



旧朝倉家住宅 2棟（主屋・土蔵）

国指定重要文化財（平成16年12月10日指定）
敷地総面積 5,419.81 m²
建築面積（主屋） 573.76 m²
建築面積（土蔵） 29.03 m²
管理団体 渋谷区（平成18年11月1日）

猿楽町29番に所在する「旧朝倉家住宅」（主屋・土蔵）が、建物としては区内で最初の国指定重要文化財となったのは平成16年12月のことです。一般公開に向けて文化庁や渋谷区が補修工事や庭園の整備を行ってきました。平成20年6月8日より一般公開しました。

この建物は、東京府議会議長を務めた朝倉虎治郎が大正8年（1919）に建て、昭和22年（1947）まで本邸として使用していました。主屋は、1階に洋間、応接室（和室12畳半）、大会議室（もともと和室と仏間がありました）、杉の間と呼ばれる和室が3部屋あります。そのそばには茶室と土蔵があり、中庭の池を回り込むと女中部屋・風呂場等が続いています。

2間続きの広間（15畳の主室と12畳半の次の間）があり、広間の両側に廊下、東面に茶室と水屋があります。主要な部屋の床、棚、書院には、銘木を用いた技巧的な造作とし、各部屋の戸襖、袋棚小襖、杉戸には、多彩な技法による障屏画が描かれています。

土蔵は、2階建てで軸部を木造、外壁を鉄筋コンクリート造としています。

主屋の南面に位置する庭園には、庭石や大型の石灯籠を多数配置し、南下がりの地形を利用した回遊式庭園となっています。

本住宅は、応接間や内向きの座敷及び茶室などが異なる意匠でまとめられた良質の建物と庭園とが良好に保存され、東京中心部に残された数少ない大正期の和風建築として貴重な存在です。

【今後の展示予定】

企画展「夏休み作品展」

平成20年8月12日（火）～9月15日（月）

*当館の講座参加者の作品展示。

特別展「春の小川」の流れた街・渋谷

—川が映し出す地域史—

平成20年9月30日（火）～12月21日（日）

*渋谷区内の川の歴史についての展示。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆9:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 ◆月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※1日以内は10名以上の団体料金

※60歳以上の方 障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.8

平成20年8月1日発行